

パーソントリップ調査を用いた大阪都市圏 における高齢者の行動に関する考察

見 崎 晴 章

近年日本においては高齢化が進んでおり、今後は更に高齢者数と高齢化率が増加し、2020年には65歳以上の人口は3,334万人、高齢化率は26.9%になると予想されている。また3大都市圏の高齢者人口の伸びは、全国平均より大きいと予想されている。

したがって本稿では3大都市圏の1つである大都市圏を取り上げ、1990年度（平成2年）実施の第3回京阪神パーソントリップ調査データを用いて、高齢者の行動における地域差について地理情報システムを利用して分析した。

ところで第3回京阪神パーソントリップ調査の調査範囲（図1）は、153市町村でその夜間人口は約1,780万人、面積9,183km²でこれは近畿2府4県の326市町村のうち、人口では87.3%を占める。この調査範囲は、近畿地方における3大都市（京都市、大阪市、神戸市）および周辺中核都市（大津市、奈良市、和歌山市）に対する通勤・通学圏（原則として5%以上）に市街地・都市計画区域の連続状況を考慮して調査区域に指定された。

本研究では、高齢者の行動分析を行うため、大阪市内と、大阪市域以外については、大阪府庁から20km圏内（除く大阪市）、大阪府庁から20km～40km圏内、大阪府庁から40km～60km圏内、大阪府庁から60km圏外から各1地域を選ぶことにした。

これをふまえ分析地域は、大阪大都市圏における地域的特性の異なる5地域を大阪都心地域からの距離別ゾーンと通勤率、高齢者比率によって決



図1 第3回パーソントリップ調査範囲（灰色部）
（円は大阪府庁から10kmごとに、バッファをとったもの。）



図2 分析地域（大阪市中央区、豊中市、御所市、粉河町、
美里町：灰色部）

定し、選定された分析地域は、大阪市中心区、豊中市、御所市、粉河町、美里町である。(図2)

まず5地域について年齢とトリップ数の関係を分析したが、一般的に言えることは、農村地域ほど高齢者の外出が少なく、後期高齢者といわれる75歳以上の老人は、外出頻度が極端に少ないか無いということである。それに較べ、大都市圏では、後期高齢者の行動が農村地域よりも多く、特に、大規模なニュータウンをかかえる豊中市においては、80歳ぐらいまでは、行動をしており、前期高齢者と言われる64歳から74歳までは、2～3トリップの行動を日常的にしていることを示している。大都市と農村地域との高齢者の年齢別トリップ数の差は、明確である。

次に5つの地域について目的別トリップの内容について分析したが、大都市圏地域と農村地域では、そのトリップ目的が大きく異なる。まず、大都市圏地域では、買物を含む多目的な行動が多いのに対して、農村地域では、買物等を含む多目的行動はすくなく、単一目的行動が多く、行動パターンが非常に貧弱であることが分かる。また、大都市圏地域に関して見られた通勤行動は、農村地域では農作業であり、地域間の差違が明瞭である。高齢者においても都市域における多目的行動が多く見られるのは商業施設や娯楽施設などの都市機能の充実が高齢者行動にも深く影響していることがいえる。

特に、千里ニュータウンを抱える豊中市の行動パターンは、大都市中心部の高齢者よりも多様であり、戦後の大規模開発地域における居住者特性の違いが高齢者行動にも反映しているようである。

最後に5つの地域における性別年齢別高齢者行動を分析すると、大都市圏地域ほど性別行動に差異が見られ、農村地域ほど顕著な差異が無くなるといえる。中央区や豊中市では、女性高齢者のトリップ数は男性より多いが、男性高齢者は、女性高齢者よりも居住区の近辺ではあるが、遠くへのトリップが多い。これは、通勤等によると考えられる。それに比して女性

高齢者は、域内トリップの中で日常的な買物行動を中心に男性よりは歩き回っていることが現状のようである。この大都市圏地域に見られた性差による高齢者行動の違いは、農村地域では顕著に見られなくなる。

以上パーソントリップ調査の元データを集計し、高齢者行動の特性に関して、トリップ数、目的別トリップ数、トリップの地域的範囲を年齢別・性別に分析し、大都市中心地域から農村地域まで5つの地域別に高齢者行動に地域差があるかどうかを分析した。その結果以下の様にまとめられる。

① 高齢者のトリップパターン総数に見られる男女差

粉河町を除く各地域は、男性よりも女性の方が良く外出している事がわかった。これは前期高齢者では特に言えることであった。ただ後期高齢者は、大阪市中央区では、男女ともほぼ同数となった。粉河町では男性も女性も同じぐらい外出を行っていた。

② 高齢者行動にみられる地域差

都市機能の整っている大阪市中央区および豊中市では、全年齢的にトリップを行っている回数が多かった。それに対し御所市、粉河町、美里町では後期高齢者はさほどトリップを行っていなかった。つまり、年齢が高くなるほどトリップ数は減少するが、前期高齢者である66歳から74歳では、都市地域と農村地域では、トリップ数に差があり、都市地域程多い。

③ トリップ目的別行動における地域差

大阪市中央区、豊中市、御所市では、買い物目的、社交・娯楽・食事・レクリエーション目的の多目的なトリップが多かった。また大阪市中央区及び豊中市では、出勤目的が、御所市では農作業目的のトリップも多かった。粉河町、美里町では農作業目的のトリップが多かった。このことは各地域の特徴を表しており、大阪市中央区および豊中市は、都市型、御所市は都市および農村並存型、粉河町及び美里町は農村型と分けることが出来る。

④ 高齢者行動範囲における特徴

各地域とも地域内移動が圧倒的に割合が高く、その中でも1箇所だけに行く2トリップがほとんどであった。この次に高い割合を示したのは、3箇所目的地のある4トリップが高く、3トリップはそれよりも低い割合となっていた。2トリップが高い割合を示している事は、高齢者の目的地となる所が、同一の固定している場所である可能性が高いといえる。しかし、4トリップが3トリップよりも高い割合である事の理由は、今回の分析ではわからないがトリップ数が多いことは、より多目的な行動がみられると言えるのではないかと。

性別には、男性の方が通勤などでやや行動範囲が広いと言えるが、女性は地域内で買物などを中心に男性より多目的に行動しているのではないかと考えられる。

⑤ 大規模なニュータウンのある衛星都市と高齢者行動

大阪衛星都市郡の1つである豊中市には、千里ニュータウンがあるが、この都市では、数多くのトリップがあり、またトリップパターンも豊富である。かといって同一トリップパターン人数も少ないわけでもない。この豊中市であっても80歳を越えるとトリップを行う者は少なくなっている。大規模なニュータウンをかかえる都市近郊の住宅都市では、多目的な行動パターンがみられ、大都市中心部である中央区の高齢者より行動パターンが多様である。これは、都市機能の充実だけでなく、居住者特性にも高齢者行動が影響されていくことを示唆しているのではないかと。